

小泉八雲の開かれた精神 OpenMind

八雲立つ出雲・松江に甦る

女性最初のノーベル平和賞受賞者



ベルタ・フォン・ズットナー

*Bertha v. Suttner*



小泉八雲の開かれた精神 Open Mind

# ベルタ・フォン・ズットナー

八雲立つ出雲・松江に甦る

女性最初のノーベル平和賞受賞者





## 歴代女性受賞者

※名前下の年号はノーベル平和賞受賞年を示します。



エミリー・ホルチ  
1946年



ベティ・ウィリアムズ  
1976年



マイレッド・マグワイア  
1976年



マザー・テレサ  
1979年



マララ・ユスフザイ  
2014年



アウンサンスーチー  
1991年



リゴベルタ・メンチュウ  
1992年



ジョディ・ウィリアムズ  
1997年



シーリーン・エバーディー  
2003年



エレン・ジョンソン・サールフ  
2011年



レイマ・ボウイ  
2011年



タワククル・カルマン  
2011年

史上最年少17歳  
ノーベル平和賞受賞おめでとうございます

ズットナー胸像制作者

*Ingrid Rollema*

イングリッド ロレマ

<http://www.ingridrollema.nl/>

オランダ生まれの芸術家。ロッテルダム彫刻アカデミー卒、ライデン総合大学で国際法、ベルギーカソリック総合大学で応用倫理学を学ぶ。2014年、アンドリュウ・カーネギーが寄付した平和宮が完成100周年を迎えたことを記念して、ベルタ・フォン・ズットナー像を制作。デン・ハーグ市現代美術館に建立された。

2号像は komatsuelectric.co.ltd の依頼によって制作され、オーストリア・ウィーン平和記念館に展示されている。

この3号像は、2014年11月23日開催のシンポジウム「八雲立つ出雲から陽が昇る」での講演にあわせて制作された、日本へ来た最初の像。





# Bertha von Suttner

ベルタ・フォン・ズットナー

1905 年

19 世紀末から 20 世紀初めにかけて活躍したオーストリアの作家・平和活動家 (1843 年-1914 年)。1889 年、小説「Die Waffen nieder! (武器を捨てよ!)」を発表し、平和活動の先駆者となる。オーストリアやドイツに平和協会を設立し、ハーグ平和会議 (1899 年・1907 年) をはじめ、様々な国際会議に協力。アルフレッド・ノーベルが平和賞を創設するうえで、大きな思想的影響を与えた。1905 年、女性初のノーベル平和賞受賞者となる。1912 年、小説「空の蛮行」を発表、世界大戦を強く警告した。ヨーロッパでは「平和運動の母」として知られ、オーストリアの 2 ユーロ硬貨に肖像が刻まれている。



ベルタ・フォン・ズットナー像  
(平和宮内)



平和宮

アンドリュウ・カーネギーによって建設、1913 年に完成

## ノーベル平和賞



ジェーン・アダムズ  
1931 年



アルバ・ミュルダール  
1982 年



フィンランド・マータイ  
2004 年

ベルタ・フォン・ズットナーは、「ベルタ・フェリツィタス・ゾフィー・フライフラウ・フォン・ズットナー (Bertha Felicitas Sophie Freifrau von Suttner)」と云々、一八四三年六月九日に伯爵の令嬢として誕生し、一九一四年六月二十一日、満七十一歳で没したオーストリアの小説家、平和運動の活動家である。

今から百九年前の一九〇五年、女性として初のノーベル平和賞を受賞している。日本では、江戸時代の天保から明治時代にかけての頃、平和運動に生涯をかけて取り組んだ情熱の女性である。

オーストリア共和国は、ベルタ・フォン・ズットナーのノーベル平和賞授与百周年を記念して、次の文を発表した。



「武器を捨てよ」——これはベルタ・フォン・ズットナーの最も有名な長編小説の題名であり、またこの注目に値する女性を取り組んだ最も重要な生涯の目標でした。ベルタ・フォン・ズットナーへのノーベル平和賞授与百周年記念日は、ズットナーの業績を振り返り、それについて論ずる絶好の機会です。

ベルタ・フォン・ズットナーはノーベル平和賞を受賞し

た初めての女性であつただけでなく、彼女の友人で後援者であるアルフレード・ノーベルにノーベル平和賞創設のヒントを与えた女性でもあります。

文筆家として、また講演者として、ベルタ・フォン・ズットナーは世界に広がる平和運動の先頭に立つて行動しました。当時の趨勢とは反対に、彼女は国家主義の狂信に立ち向かい、戦争と憎しみを扇動する人々や反ユダヤ主義者が掲げる攻撃的スローガンに断固として反対したのです。彼女はこれらのイデオロギーが持つ破壊的な力を見抜き、予言者のごとく述べました。「次に起こる戦争は、これまでの戦争とは比較にならないほど恐ろしいものとなるでしょう」と。

ベルタ・フォン・ズットナーは、二十世紀の破壊的な世界戦争を体験することなく、世を去りました。この恐ろしい二つの世界戦争の経験を知る私たちは、ズットナーが生涯をかけた事業を思い起こし、更に推し進めていく使命があります。

オーストリアの外交は、ベルタ・フォン・ズットナーの精神を受け継ぎ、これからも世界の平和と人権を守るために尽力してまいります。なぜなら継続的な平和と安全は、人権が保障されているところにしか在り得ないからです。

ベルタ・フェリツィタス・ゾフィー・フライフラウ・フォン・ズットナーは、一八四三

年六月九日、プラハの名門貴族キンスキー伯爵家に、伯爵令嬢として、フェリツィタ・キンスキー・フォン・ヒニツツウント・テツタウと妻ゾフィー・ケルナーの間に、チエコのプラハにあるアルトシュテター・リング通りのキンスキーの家で生まれた。

チエコは中央ヨーロッパにあり、東西に細長い形で、北はポーランド、東はスロバキア、南はオーストリア、西はドイツと国境を接している。

首都はプラハで市内中心部をウルタヴァ川が流れ、古い町並みや建物が数多く現存している。六世紀の後半にスラヴ民族によってウルタヴァ川河畔に人々が集まり集落ができあがる。九世紀後半にはプラハ城、十世紀頃にヴィシエフラト城ができ、二つの城に挟まれた街が形成され、ユダヤ人の入植が始まる。その頃から、プラハは幾度かの戦禍に遭って荒廃した。

十三世紀になると、プラハ城、市街地の整備などの都市開発が行われ、ローマなどに並び、ヨーロッパ最大の都市に発展し、黄金のプラハといわれた。



十四世紀以降は戦火が続くが、十五世紀後半は、ヨーロッパの文化の中心都市として栄華を極める。だが、再び戦場となり、宗教や文化は弾圧を受けた。そして、チェコは独自の文化を失い、二世紀以上も暗黒の時代と呼ばれるチェコ民族文化の空白時代を迎えた。

その後、長い時を経て、プラハは、第一次、第二次世界大戦の被害にも、また、その後の資本主義の高度経済成長にも巻き込まれなかった。そのことから、古い建築から近代建築までそれぞれの時代の建築様式が並ぶ、ヨーロッパの建築博物館の街になり、ユネスコの世界遺産にも登録されている。



ベルタは伯爵令嬢として誕生したが、一度として上流階級に属したことはなかった。ベルタの母ゾフィーは、一市民の出身であったことから、夫の死後はその実家から関係を断たれる。そのため、幼少の頃から母と共に過ごすことになり、母のゾフィーと共に、ブルノで過ごす。



オーストリア・ハンガリー帝国の国章  
(1918年迄)

ブルノは、チェコ共和国第二の都市である。後に、オーストリアの首都ウィーンに転居するが、更に、ウィーン郊外のロースターノイブルクに移る。その後、ドイツのヴェースバーデン、フランスのパリ、再びドイツのバーデン・バーデン、イタリアのベネチア、ドイツのバート・ホンブルグで静かな暮らしをしていた。

だが、その間、ヨーロッパでは戦火の兆しが見えていた。一八六三年、現在のポーランド、リトアニア、ベラルーシ、ウクライナ北部とロシア西端、つまり旧ポーランドとリトアニア共和国領で発生したロシア帝国に対する反対活動が活発化し、遂に武装蜂起となった。俗に「一八六三年蜂起」と呼ばれる反乱である。一八六三年一月二十二日に始まり、翌年の四月十一日に終結したことから「一月蜂起」とも言われる。

その蜂起前夜、ベルタは被支配者側の指導者が集まる会に出た。その会では、反乱はいくら頑張っても勝利にはほど遠いという雰囲気があった。殆どの男の指導者がそう語るのを聞き、参加していた女性のほうから、ポーランドの男は恥さらしだという声上がる。

これを聞いていたベルタは、女性の持つ男性像というも



ベルタの母ゾフィ

のを闘いの勇者から平和主義者に変えなくてはならないと思つたという。

その頃、三十歳になつていたベルタは三度の婚約をする。最初は、三十四歳も年上のスタフォン・ハイネ・ゲルデルン男爵であつたが、金持ちの男に自分を売り渡すような気持ちになり直ぐに解消し、その後、別の二人と婚約をするが、いずれも結婚には至らなかつた。

一八七三年、カール・フォン・ズットナー男爵の家で、その四人の令嬢のための住み込み家庭教師となつた。伯爵令嬢として生まれたベルタは、家庭教師とはいえ使用人と同じであつたが、ズットナー男爵の息子アルトゥーア・グンダッカー・フォン・ズットナーと出会い、恋をして結婚を申し込まれる。だが、家族が反対したため諦めた。しかし以後、二人は密かな関係を続ける。

ダイナマイトの発明で大富豪になつたスウェーデンの科学者アルフレッド・ノーベルとベルタが偶然の出会いをしたのは三十三歳の時であつた。

当時、ノーベルは数年間、世界各地を転々とした後、パリに定住することを決めた頃である。パリに住んでいたノーベルが、秘書の募集を新聞広告に出した。ベルタは、それに応じて即座に採用される。後に、ノーベル平和賞が誕生することに、その出会いは大きな影響があつた。

ノーベルは、孤独で憂鬱になりがちな性格であつたが、



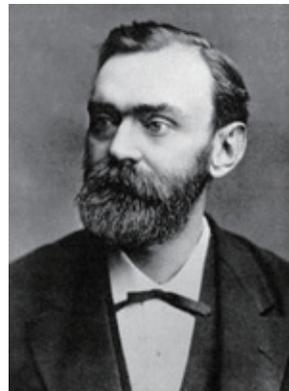
優れた知識を持ち幾つかの外国語に堪能なベルタに恋心を持った。

しかし、アルトゥーア・フォン・ズットナーへの愛を忘れられないベルタは、ノーベルの秘書の仕事を一年足らずで止めてパリを離れる。そして、密かに連絡を取っていたアルトゥーアと翌年の六月十二日に、オーストリアのウィーンにある聖エギディオ教会で結婚してグルジアへ移った。ベルタがズットナーの姓を名乗るのは、その時からである。

だが、経済的に苦しかったため、ベルタ・フォン・ズットナーは語学や音楽の教師として生活費を稼がねばならなかった。



ノーベルの住まい



アルフレッド・ノーベル

現在のトビリシ市、クタイス市、ズクデイ市などに滞在した数年の後、ズットナー夫妻はオーストリアに帰った。

帰国した翌年、夫と共にパリを訪れた時、そこで初めて組織化したロンドンの平和運動の存在を知り、ベルタ・フォン・ズットナーはそれを生涯のテーマにすることになった。

更にその翌年の一八八九年、ズットナーは反戦小説『武器を捨てよ (Die Waffen nieder!)』を発表する。

小説は、平和を訴え、戦争の悲惨さを描き、家族の幸せが戦争によって失われていく過程を綴った作品で、当時としては珍しいことであるが女性の視点から語られている。小説は多くの読者に衝撃を与え、一躍、ベルタ・フォン・ズットナーは国際的な平和活動の指導者と呼ばれるようになった。女性には選挙権もなく、社会的に広く活動する場のなかった時代からすれば驚くべきことでもあったと言えよう。

ベルタ・フォン・ズットナーは、一八九〇年から一年間、イタリアのベニスに滞在し、ローマで開かれた「第三回世界平和会議」へ初めて参加した。そこで、「列国議会同盟」の関係者と知り合うなどして、平和運動への活動を拡げていくことになる。

オーストリアでは、ほぼ一人の力によって一八九一年に「オーストリア平和協会」を創設した。こうしてズットナーは、その頃から世界に広がり始めた平和運動の先頭に立つて運動の拡大を図る。

ローマで開かれた国際平和会議での協議を経て、スイスの首都ベルンに「常設国際平和ビューロー」が設立された。当時、日本は明治中期であり、数年後には日清戦争、日露戦争への道を歩み始める時期であったが、世界は平和を求めていた。

その頃からベルタ・フォン・ズットナーは平和への思いを深くし、当時の国家主義によ



武器を捨てよ! 新日本出版社刊

と言いつつ続けた。争いを好まず、常に相手のことを考えようとする精神を心に秘めていたのである。

平和主義者としてベルタ・フォン・ズットナーは、国際平和ビューローにも加入し終身会員となり、その会の副会長も務めるなどして、活動は国際的なものとなり、平和運動維

る狂信に立ち向かい、戦争と憎しみを先導する人々や反ユダヤ主義者が掲げる攻撃的スローガンに断固として反対した。

一八九一年には、夫のアルトゥーア・フォン・ズットナーが「反ユダヤ主義防止協会」を設立し、妻のベルタは熱心にそれを支持した。そして、ベリン、チューリッヒなどにも赴き、平和運動を続ける。

そのことによつて、二人は国粹主義者、教権主義者、反ユダヤ主義者を敵にまわすことになる。だが、ベルタ・フォン・ズットナーは、「迫害の犠牲者を迫害から守るには、たった一つの誠実な方法しかありません。——彼の側に立つことです」

誌『武器を捨てよ』を発行した。この雑誌の題名は、著書「武器を捨てよ！」から採用されたという。その活動は、イギリスの歴史学者ヘンリー・トマス・バックル、同じイギリスの哲学者、倫理学者であるハーバート・スペンサー、生物学者のチャールズ・ダーウィンなどに大きな影響を受けたものであった。

その頃、ロシアの兵士と交わした言葉がある。ベルタ・フォン・ズットナーは、「あなたは自分の銃剣を研ぐことが、平和だというのですね？」と聞き、兵士は、「誓って言うが、銃剣を研いでいる間、私は平和を願っているのだ」と答えたという。何事につけても、世界の平和ということを念頭においていたことがよく理解できる。

ベルタ・フォン・ズットナーは、一八九四年、ロシアの新しい皇帝となったニコライ二世に大きな期待を寄せていた。ニコライ二世が、軍備の縮小と国際平和会議を求め、平和のマニフェストを布告したからである。

一八九九年、ロシア皇帝が提唱した最初の平和会議が、オランダのハーグで開かれた。しかし、参加したのは平和運動家達ではなく、各国の外交官、政府高官や軍人達だった。そのこともあって、軍備縮小と戦時国際法についての論議は殆ど成果がなかった。

だが、ベルタ・フォン・ズットナーは、テオドーア・ヘルツルの新聞であるデイ・ヴェルトの特派員としてハーグに赴き、そこでシオニズムのために地道な活動を続けた。

テオドーア・ヘルツルは、シオニズム運動を起こしたジャーナリストである。シオニズ

ム運動とは、イスラエルとも呼ばれるパレスチナに故郷を再建、また、ユダヤ教やイスラエル文化の復興運動である。

だが、ニコライ二世のフィンランドに対する政策や満州政策によって、その主張の偽りが明らかとなったが、ベルタ・フォン・ズットナーは擁護していたので、平和運動に携わる多くの同志を困惑させたという。そのことについて、ベルタ・フォン・ズットナーは次の言葉を述べている。

「国民の意志よ。帆を膨らませよ！ 平和を目指す船に、船長が誕生したのです。……もう一息です」と。

モナコ公国のアルベル大公も、ベルタ・フォン・ズットナーの影響を受けてヨーロッパの平和運動に参加した。モナコ公国は、南フランスの地中海に面したイタリアとの国境に程近いところである。

ベルタ・フォン・ズットナーは、将来、アルベルから経済的な援助を得たいと考えていたが、遂にその希望は叶わなかったという。

一九〇四年及び一九一二年の二度にわたって、ベルタ・フォン・ズットナーはアメリカ合衆国を訪れる。既に六十歳を超えていたが、アメリカ国内のあちこち



アルベル大公

で講演を続け、平和運動の支持者を探し求めた。

アメリカの大実業家であるアンドール・カーネギーも高額の資金を提供し平和運動を支持したこともあり、アメリカで最も大きな成果を得た。アメリカの国柄もあるが、ベルタ・フォン・ズットナーは女性運動の代表として大きな賞賛を勝ち取る。

一方、アルフレッド・ノーベルとの個人的な関係は秘書を辞めた後も続くが、ノーベルの晩年には、考え方の違いから対立もしていた。

ベルタ・フォン・ズットナーは、平和への取り組みで平和会議や講演、出版などを主体とした平和協会の設立を訴えていたが、ノーベルは国家間の安全保障条約の締結や現在の国連のような組織を目指していたためである。

ノーベルが一八九六年に死去する前まで、文通などを通じた関わりは続けられていた。そのことから、ノーベルがノーベル賞に平和部門を創設したのはベルタ・フォン・ズットナーの影響が大きかったとされる。



アンドール・カーネギー

ノーベルは亡くなる前の年、一八九五年に書いた遺言書に、ノーベル平和賞の創設をと書き残している。その賞が制定された一九〇一年の第一回受賞者をベルタ・フォン・ズットナーにしようとしていたことは想像ができる。

ベルタ・フォン・ズットナーにノーベル平和賞授賞が認定されたのは、ノーベルが亡くなってから九年後、一九〇五年十二月のことで、ベルタ・フォン・ズットナーがそのことを知ったのはドイツでの講演旅行中である。

実際の受賞は、翌年の春、現在のオスロであるクリスティアニアであった。一説には、当時のスウェーデン国王オスカル二世がベルタ・フォン・ズットナーを過激な平和運動家として嫌ったからとも言われているが定かではない。

そして、二人目の女性受賞者が誕生するのは、それから四半世紀の時を経た一九三一年のアメリカ人、ジェーン・アダムスである。

女性として初めてノーベル平和賞を受賞はしたが、夫のアルトゥア・フォン・ズットナーは妻の授賞式での姿を見ることなく、一九〇二年二月十日に亡くなった。



晩年の夫 ズットナー



環境保全などの分野にも広げた。

ともあれ、ノーベル平和賞は、ベルタ・フォン・ズットナーの平和運動がなければ存在することはなかったと言われる。平和賞の授賞は制定されてから五年後のことであり、ベルタ・フォン・ズットナーは数年間受賞を逃したことに落胆していた。それは名誉を得ようというのではなく、平和運動のために資金を必要としていたからである。

ノーベル平和賞を受賞した後も、精力的に平和についての運動を続ける。スカンジナビア半島を縦断する講演、オランダの首都デン・ハーグでの第二回平和会議へ参加したが、ベルタ・フォン・ズットナーはその前夜、同志に向かい「荷造りは終わりました。明日は『平和誕生の地』へ出発です」と微笑んだというエピソードがある。

世界を震撼させた人類史上最初の第一次世界大戦が始まったのは、一九一四年であり以

後四年間続くことになる。

その当時、あらゆる国が慌ただしく軍備の拡張を進めていた。ベルタ・フォン・ズツナーはそれを知り、自分が世界中を回り根強くやってきた平和運動はいったい何であったのかと思ひ、絶望さえ感じた。大規模な戦争が起きる危険を訴え続け、支配者層からは嘲笑されもした。

しかし、それでも国家主義、軍国主義的な価値観を断固として退けようとし、挫けることはなかった。軍備縮小や国家間の紛争を平和的に解決しなければ、地球を壊滅するほどの悲惨な世界が到来するであろうと考えていたからである。

一九一四年六月二十八日、オーストリアの皇位継承者であるフランツ・フェルディナント大公夫妻が銃撃暗殺されるというサラエボ事件が起きる。それを契機に、各国軍部は軍事の準備を始めることとなった。それでも、各国政府および君主は開戦を避けるため力を尽くしたが、戦争計画の連鎖的発動を止めることができず、その一か月後、オーストリア・ハンガリー帝国はセルビアに宣戦布告し、瞬く間に第一次世界大戦が始まった。

一九一四年六月二十一日、ベルタ・フォン・ズツナーは、オーストリアの首都ウィーンで七十一歳の生涯を閉じる。サラエボ事件、それによる第一次世界大戦の勃発を知ることはなかった。世界大戦の始まりを知らずに亡くなったことは、半世紀にわたって続けた平和運動の中で、唯一幸せなことであったのかもしれない。

遺体はベルタ・フォン・ズットナー本人の意志によって火葬され、その遺骨はドイツのゴータに埋葬された。ゴータは、少なくとも八世紀に遡る古い町でドイツにおける啓蒙主義の中心地である。

ベルタ・フォン・ズットナーの著書『武器を捨てよ!』は、伯爵家の令嬢が四度の戦争を経験し、二人の夫を失う中で平和主義に目覚める物語であり、各国で賞賛を得て十六か国で翻訳された。

小説はベルタ・フォン・ズットナーの没年に映画化され、日本語訳は平成二十三年、新日本出版社から出版された。そして、平和を愛し平和運動に関心を寄せて活動する多くの人たちに読まれ続けている。

オーストリアの2ユーロ硬貨には、ベルタ・フォン・ズットナーの肖像が刻まれ、今に平和への思いを伝えている。



ウィーンの職場でのベルタ・フォン・ズットナー

## ズットナー女史没後百周年を迎えて

—成果(結果)∥能力(0～100)×熱意(0～100)×考え方(—∞～0～+∞)—

小松昭夫

皆様こんにちは。

人間自然科学研究所の理事長小松昭夫と申します。

今日、ベルタ・フォン・ズットナー女史没後百周年を記念する意味深い場所で、彼女を尊敬する皆様とお会いし、ズットナー女史の平和活動の意義を共有できることを嬉しく思います。

先ほどの動画で紹介させていただきましたが、人間自然科学研究所は、人類の特性と歴史を考察し、「積極的平和主義」に徹し、二十年の歳月をかけ、人類進化に至る対立・統合・発展が循環する「和の文化」を生み出すため、世界の戦争・平和記念館を訪問、民間外交を重ねてきました。

一九四五年七月二十九日、日本「ポツダム宣言」黙殺と報道、八月六日広島、九日長崎に人類史上初めて原爆投下、九月二日ミズーリ号での調印により、イタリア、ドイツに続いて日本の「敗戦」が確定、人類史上例のない被害をもたらした第二次世界大戦が終わりました。

日本は天皇放送が行われた八月十五日を「終戦」記念日と定め、今日に至っています。この「終戦」という言葉を積極的に生かし、「人類社会の戦争を終わらせるさきがけを務める国家」と定義づければ、日本から世界恒久平和への道筋を示せると確信しています。

百年以上前に世界大戦の勃発を予測し、小説『武器を捨てよ!』で戦争阻止を世界に訴え、空爆により人類が

破滅に至ることを『空の野蠻化』で警告、欧米を中心に平和活動を展開し、ノーベルに平和賞創設を進言、女性初のノーベル平和賞（五番目）を受賞したベルタ・フォン・ズットナー女史。この志を現代に蘇らせることが、私たちに求められています。

アンドリュー・カーネギーの寄付によりオランダ・ハーグ市に建設された「平和宮」（国際司法裁判所）百周年を記念して、二〇一三年、イングリッド・ロレマさん制作のズットナー女史の彫刻像が建立されました。その除幕式に参列し、ロレマさんのお人柄と、深遠な念いの伝わる像に魅了されました。関係者の方々の協力を得て、本日、ズットナー女史が亡くなったこの地で、その二号像を没後百年を記念して披露させていただきました。この街で展示された後、日本に移し、これまでズットナー女史を知らない日本人に広く紹介させていただきました。

今回の展示をきっかけに、強く平和を希求する人々によって、ズットナー像が世界各地に次々と建立され、ズットナーの志が蘇り、平和活動の資金が生まれ、確かな平和への流れが始まることを願っています。

私が生まれ育ち、四十二年前に創業した会社の所在地でもある、日本国島根県は、核の脅威が迫る朝鮮半島の対岸に位置し、日本最大の原子力発電所があります。島根県は、二〇〇五年に韓国と日本の中間に位置する竹島（韓国名独島）に対し、領土権の早期確立を目指した運動を推進する目的で「竹島の日」を制定しましたが、このことが今日の東アジアの海・島をめぐる紛争の引き金になりました。

一九〇七年、第二回万国平和会議に大韓帝国使者として派遣された李儁（リジュン）烈士死去、一九一〇年日本の韓国併合、一九一四年ベルタ・フォン・ズットナー死去、第一次世界大戦勃発。私はこれらの経緯と現在の世界情勢を日本で受け止め、二〇一四年六月十七日、オーストリア・ウィーンから、構想と提言を発表いたします。

構想とは、「国民国連・国際平和センター」です。

現在の国連は、一九四五年二月のヤルタ会談で合意され、常任理事国五か国を含む大国主導で運営、一九三〇年の「政府代表」で構成され、時には正義を掲げ武力を行使しています。「国民国連」は、人類の特性と歴史の経緯を生かし、論理的討議を通じて、長い時間軸で道理を実現するストーリーを生み出す、「国民代表」で構成される集団です。

また、「国際平和センター」は、対立が続く日本の沖縄の人類史から見た地政学的な意味を研究する中から生まれました。人類の未来を拓く「誓いの施設」として同センターを創設し、「世界恒久平和発祥の島」とする構想です。

これは、次の主要三施設により構成されます。

- (1) 世界の戦争と平和関連博物館を情報通信技術 (ICT) で結び、各施設の資料と写真・映像を総合的に扱い、世界に配信する「世界戦争平和映像センター」。
- (2) 世界中から近代の戦争の全戦没者電子データを集め、永遠に記録、閲覧できる「メモリアルタワー」。
- (3) 最先端の科学技術と ICT を生かし、平和会議、平和貢献者への顕彰、「知のオリンピック」などを開催し、「和の文化」を生み出す「和の殿堂」。

そして提言とは、米国・露国・中国の三大核大国の結節点、朝鮮半島と日本列島を三大核大国の積極的支持を得て非核化し、「和の文化」発祥地とすることと、すべての核保有国の段階的な核削減の同時スタートの提言です。

今から三百年前、私の故郷、出雲国日吉村（現・鳥根県松江市八雲町）の周藤彌兵衛翁は、私財を投じ、五十六歳から九十七歳まで四十二年をかけて、硬い安山岩の霊山・剣山つるぎやまをノミと槌で切り崩し、切通しを完成、

洪水を繰り返す川の流れを変え、村人を救い、百二歳で大往生されました。

ズットナー女史と同様に志を貫いた周藤翁の生涯を描いた小説『悠久の河』を日本水道新聞に二〇一四年七月から連載し、その後、日英韓中露の五か国語で出版を予定しています。また、ズットナー像と同時期に、中国山東省（一九三七年国共合作の地）で翁の大銅像を制作、八月一日「水の日」に、八雲町に建立します。

ギリシャ生まれのラフカディオ・ハーンが、明治時代、初めて欧米に日本文化を紹介した『知られざる日本の面影』は、彼が鳥根県松江市に住んだ時の体験を元にして書いた作品です。

そして今、小説『悠久の河』が生まれたこの地域を「和の文化」創造の原点に、情報通信技術（ICT）を用いて「世界の水と平和」のストーリーを描くことにより、提言、構想の具現化に向け、急速な流れが始まることを念じています。

ご清聴ありがとうございました。

# On the Occasion of Bertha von Suttner's Centenary

—Result = Ability (0~100) × Passion (0~100) × Thought (−8~0 ~ +8) —

Akio Komatsu

Ladies and Gentlemen:

My name is Akio Komatsu, chairman of the board of directors of The Human, Nature & Science Institute Foundation (HNS) in Japan.

It is my honor and greatest pleasure to meet you all today who love and respect our Bertha von Suttner at this special place commemorating the one hundredth year of her death and share with you her hopes and wishes throughout her life dedicated to peace.

As explained in the video, we (HNS) have, as positive Peace advocators, devoted our efforts since twenty years ago to creating a framework of human empathy through unofficial diplomacy, visiting war and peace museums world over.

According to newspapers, Japan decided to ignore the Potsdam Declaration on July 29th of 1945, and the atomic bombs, for the first time in human history, were dropped on Hiroshima and Nagasaki. World War II, the most devastating war in history ended when Japan surrendered following after Italy and Germany by signing on the Missouri on September 2nd. In Japan August 15th has been designated as the Day of the "Termination

of the War” since the Emperor Hirohito made a radio broadcast on the day. The term “termination of wars,” we strongly believe, should have a very positive meaning that “Japan should be a forerunner to help put an end to all wars for good and bring about perpetual peace on earth..”

About a century ago Bertha von Suttner, a novelist and active pacifist in Europe and America, predicted the outbreak of a world war in her novel *Lay Down Your Arms*, warned the annihilation of mankind in *Barbarization of the Sky*, influenced Alfred Nobel in his decision to include a peace prize among Nobel Prizes, which she won as the first lady (the fifth laureate) in history. It is, I believe, our duty to make the best use of her renewed hopes and teachings in our world today.

In 2013, a sculpture of Suttner was made by Ms. Ingrid Rollema, a sculptor, and displayed during the centennial commemoration of the foundation of the Peace Palace (the World Court) in The Hague which was constructed with the donation from Andrew Carnegie. I was at the unveiling ceremony then and deeply moved by Ms. Rollema’s personality and her work which definitely carries her profound thought. I am happy to be able to display all thanks to many related people, a second bust of Suttner by Ms. Rollema before you today at this special place where she passed away a century ago. After the exhibition in Vienna the sculpture will be moved to Japan to advocate peace widely to the people who do not know much about Suttner. I also hope that many more sculptures of her will be built all over the world to encourage both people and money to form a steady current of peace.

Shimane Prefecture, Japan where I was born and started my business forty-two years ago is located on the other side of the Korean Peninsula where nuclear threat is a reality by now. Besides, it has the largest nuclear

power plant in Japan. In 2005 Shimane Prefecture designated the “Day of Takeshima (Dokdo in Korean)” in their efforts to help establish the Japanese sovereignty over the island. However, it only triggered the further conflicts and disputes over the territorial issues of the islands and the seas in East Asia.

After contemplating in Japan the death of Yi Jun in 1907 who lived by his belief and was the chief delegate of the Imperial Korea to the 2nd International Peace Conference, the death of Bertha von Suttner in 1914, the outbreak of World War I, etc., and how these and other events were interwoven to form the present situations of the world, I would like to announce our project plan and make a proposal this day of June 17th of 2014 in Vienna, Austria.

It is a project of “Peoples’ United Nations & the International Peace Center.”

The framework of the United Nations was agreed upon in Yalta Conference in February of 1945 and the five permanent members of the UN Security Council have been playing leading roles of the international organization of 193 members who represent their own governments. They sometimes use their armed forces in order to practice justice. “The Peoples’ United Nations” on the other hand is a group of people who “represent their own people” to discuss as rationally as possible on the bases of human nature and history how to make stories by which justice functions for everyone in the long run.

“The International Peace Center” plan was born from our studies of geopolitical meanings in the human history of Okinawa which is not yet free from various kinds of antagonism. The center will be a “facility of promises” to open the door to the future of humankind and help Okinawa become an “Island of Perpetual World Peace.” The Center consists of the following three main institutions.

(1) “The World War and Peace Picture & Video Center” will play a role of a kind of “central museum” of war

and peace museums in the world by inter-connecting them on the internet by using ICT.

(2) "The Memorial Tower" will collect the data of all the war victims in modern wars and record them permanently in the form of electronic data to which visitors have free access from any place of the world.

(3) "The Palace of Wa (peace/harmony)" will make the best use of the forefront of science and technology and sponsor many activities to bring forth "the culture of Wa" such as peace conferences, "Wisdom Olympics," throwing light on people who have contributed to peace, etc.

On behalf of the Human, Nature and Science Institute I would like to propose to make the Korean Peninsula and Japan a nonnuclear zone with the strong support of the three big nuclear powers and designate the area as a birthplace of "Wa culture." Also, the step-by-step nuclear disarmament of all the nations with nuclear weapons, we believe, should start simultaneously.

About three hundred years ago, Sutoh Yahee of Hiyooshi Village of Izumo Province (now Yakumo Town, Matsue City, Shimane Prefecture), also my hometown, spent his own fortune and cut through a hard andesite mountain called Mt. Tsurugi with his hammers and chisels in order to change the route of the often flooding river and saved the villagers. He worked on the project for 42 years from 56 to 97 and died in peace at the age of 102.

His unyielding story like that of Bertha von Suttner will appear in the form of serialized novel titled The Eternal River on Nihon Suido Shinbun (The Journal of Japanese Water Service) beginning in July, 2014. Then it will be published as a book in five different languages: Japanese, English, Korean, Chinese and Russian.

A huge bronze statue of him was made in Shandong Province, China (known as a place where the collaboration between Kuomintang and the Communists took place) at around the same time when the sculpture of Suttner

was made in Europe. His statue will be shipped to Japan to be placed in Yakumo Town on August 1st which is designated as the "Water Day."

A book titled Glimpses of Unfamiliar Japan was written to introduce Japanese culture in early days to the Western world by Lafcadio Hearn who was born in Greece and came to Japan during the Meiji period. He wrote the book basing on his own experiences in Matsue.

Standing on Izumo, a birthplace of "Wa culture" and the land where The Eternal River was written, we will keep writing our own story of "world peace and water," making full use of ICT. It is our sincere hope that a steady current will be made soon and start running into a major stream toward our proposal of nuclear disarmament and the world peace project.

Thank you very much.

## 人間自然科学研究所の歴史

- 一九八八年 四月 若手経営者二十名で「知革塾」開塾
- 一九九四年 四月 人間自然科学研究所設立。郷土の偉人を顕彰する出版活動を中心とする「二村一志」運動開始
- 一九九四年十一月 「第一回神在月縁結び世界大会」開催
- 一九九五年 四月 「周藤彌兵衛シンポジウム」開催
- 一九九五年 六月 「人と水と食のシンポジウム」開催
- 一九九六年 九月 中海・本庄工区の未来構想シンポジウム開催
- 一九九六年十一月 「母なる中海」ダイヤモンド社より出版
- 一九九七年 三月 「第二回神在月縁結び世界大会」開催
- 一九九七年 六月 韓国独立記念館訪問、日本人として初めて献花、寄付
- 一九九八年 七月 大韓赤十字社を通じ朝鮮民主主義人民共和国へ食糧支援
- 一九九九年 七月 「太陽の国(SUNMO)」出版
- 一九九九年 十月 「第三回縁結び世界大会」開催
- 二〇〇一年 五月 中国人民抗日戦争記念館訪問、献花
- 二〇〇二年 二月 日中英対訳「論語」出版
- 二〇〇二年 八月 「治水の偉人・大梶七兵衛」小説・漫画・児童文学出版「出雲三兵衛」完成
- 二〇〇二年 九月 中国山東省棗莊・台兒莊大戦記念館で、中国側三〇〇〇人、日本側四十人で孔子、孟子、周藤彌兵衛翁、清原太兵衛翁の銅像完成式
- 二〇〇三年 十月 日本最大の中国庭園「燕趙園」に孔子・孟子像を建立
- 二〇〇四年 十月 「太陽の國」推進シンポジウムを開催
- 二〇〇五年 九月 中国南京記念館を訪問、献花。中国中央電視台ニュースで三回にわたって全国放送。在日本中国大使館ホームページに掲載された。
- 二〇〇五年十二月 ハワイ「アリゾナ記念館」真珠湾攻撃記念式出席、献花
- 二〇〇六年 三月 燕趙園に西王母と八仙人大理石像を紹介建立
- 二〇〇六年 三月 「平和環境健康特別区申請 特別シンポジウム」くにびきメッセで開催

- 二〇〇六年十月 小松理事長、釜山市庁国際会議場で講演
- 二〇〇六年十一月 出雲大社で「神有月 和讓平和フォーラム」開催
- 二〇〇七年三月 燕趙園に孫子像を建立
- 二〇〇七年十二月 南京大虐殺記念館改築式典招待出席
- 二〇〇八年二月 私たちにとつての「ある小さな小さな島」の話 座談会開催
- 二〇〇八年三月 「なぜ出雲から世界平和か」座談会開催
- 二〇〇八年六月 松江市にて「族譜」公演。小松理事長が主催団体会長に
- 二〇〇八年十月 第六回国際平和博物館会議、京都・広島開催協賛、松江で「出雲和讓フォーラム」
- 二〇〇九年二月 中国古典名言録、竹島「独島問題入門」、出版記念講演「混沌の時代 出雲から陽が昇る」開催
- 二〇〇九年九月 ロシア・ウラジオストク、ハバロフスクの第二次世界大戦慰霊碑を訪問・献花
- 二〇一〇年二月 松江市にて開催の将棋第六十期王将戦を支援
- 二〇一〇年二月 「朝鮮半島と日本列島の使命」発刊
- 二〇一〇年十月 アジア太平洋平和研究学会で、小松理事長講演
- 二〇一〇年七月 韓国の月刊誌「市民時代」に「真の愛国者」として特集される
- 二〇一〇年十一月 小松昭夫代表取締役が「藍綬褒章」受章
- 二〇一〇年十一月 国際マンガサミット鳥取大会にて、漫画、周藤彌兵衛、清原太兵衛、大梶七兵衛を展示
- 二〇一二年九月 オランダ・ハーグ市「カーネギー平和宮百周年」記念事業として、小松理事長が「世界平和事業家二十人」に選ばれる
- 二〇一四年六月 ベルタ・フォン・ズットナーの記念事業に取組み、平和大賞をウィーン平和ミュージアムより受賞
- 二〇一四年八月 松江市八雲町に周藤彌兵衛翁像除幕
- 二〇一四年十月 オランダよりベルタ・フォン・ズットナー三号像が松江市着（イングリッド・ロレマ作  
一号像はカーネギー財団発注、二号・三号像は小松理事長発注 二号像はオーストリア・  
ウィーンで展示）
- 二〇一四年十一月 イングリッド・ロレマ氏オランダより来日。松江市くびきメッセで講演会・シンポジウム  
「小泉八雲の開かれた精神OpenMind」八雲立つ出雲から陽が昇る 女性が羽ばたく地方  
創生のモデルをめざして開催

## あとがき

一九四五年九月二日、百年前にペリー提督が掲げた星条旗を掲げ、東京湾に入港した米戦艦ミズーリ号で日本は降伏文書に調印、史上最大の犠牲を出した第二次世界大戦が終わり、日本は連合国による占領を受けました。朝鮮戦争中の一九五一年にサンフランシスコ講和条約に調印し、独立。日本を含む旧枢軸国を対象にした敵国条項の入った国連憲章（一九四五年十月発効）を受け入れ、一九五六年に国連に加盟しました。その後、東西冷戦下の高度経済成長という繁栄もありましたが、二十一世紀を迎えた現在、近隣諸国との歴史問題と世界の激動期とが重なり、難しい状況になっています。

島根県は一九六六年、県庁所在地松江市の十キロ圏内に原子力発電所を誘致、日本最大を含む三基共、運転できない状態が続いています。社会の構造的疲弊が、「財政ひっ迫」「中海干拓事業中止と大橋川開削」「竹島の日制定」「公共施設の陳腐化、利用者の減少」等を生み、文化・政治・経済の活力が低下、急激な人口減少を招き、閉そく感が漂っています。一方、ギリシアで小泉八雲の「開かれた精神 OpenMind」がよみがえり、錦織圭選手の活躍、錦織良成監督と EXILE TRIBE HIRO が創る映画「たたら侍」への期待も高まり、松江・出雲に注目が集まっています。

日本と朝鮮半島は、核大国の米国・中国・露国の地政学的結節点にあります。安倍内閣

の掲げている「積極的平和主義」「地方創生」「女性の活躍」の議論から新しい時代が生まれる可能性ができました。これには中小企業の自律的再生と、国民の気づきが必要不可欠です。

当社が市場創造したシートシャッターも大手の参入が進み、全国・世界に広がり市場が急拡大しています。また、松江発の Ruby で開発したクラウド総合水管理システム「やくも水神」も、「次世代の社会インフラ」として野村総合研究所が二〇一〇年に東京国際フォーラムで二七〇〇人を前に発表、導入自治体が国交省の成功モデルともなり本格的な普及期を迎えています。

やくも水神の原点「水の偉人・周藤彌兵衛翁」の大銅像を日中戦争の激戦地山東省で制作、八月一日「水の日」に松江市八雲町に地元の協力を得て建立しました。そしてカーネギー財団、オランダの芸術家ロレマさんの協力を得て、小説「武器を捨てよ」「空の蛮行」で百年前に世界大戦を強く警告した、女性初のノーベル平和賞受賞者ベルタ・フォン・ズットナーの像建立活動を始めました。シンポジウム講演者のイップ常子さんの参加で、オーストリア政府企画によるズットナーの演劇「情熱に燃える魂」が、東京、広島、神戸、京都、名古屋で上演されます。

この出版がきっかけとなり、平和への念いを込めた「国民国連構想」(二〇〇九年北京、二〇一四年ウィーンで発表)が、長崎大学核兵器廃絶研究センターの「北東アジア非核兵

器地帯構想」マララ・ユスフザイさんのノーベル平和賞受賞、出雲大社の遷宮と慶事を追  
い風に、出雲から世界へ羽ばたくことを祈っています。

二〇一四年十一月二十三日

小松電機産業株式会社

人間自然科学研究所

代表 小 松 昭 夫

## A Postscript

World War II ended with the greatest sacrifice in human history on September 2, 1945 when Japan signed the Instrument of Surrender on board USS Missouri at Tokyo Bay under the very same Star-Spangled Banner flown by Commodore Perry about a century before and the occupation of Japan by the Allied Powers began.

In 1951, in the middle of the Korean War, Japan regained its independence by signing the Peace Treaty in San Francisco and became a member of the United Nations, accepting the U.N. Charter, (effected in October, 1945), which contains the enemy clause for the old Axis Powers including Japan. Even though Japan enjoyed a period of prosperity under the Cold War, we now face complicated problems in the 21<sup>st</sup> century stemmed from disagreements with the neighboring countries on historical issues and political turmoil of the world.

In 1966 upon the invitation of Shimane Prefecture they built a nuclear power plant within the 10-km circle of prefectural capital Matsue. The reactors have increased in number and now count three including the largest in Japan, but none of them is in operation at present. The structural exhaustion of the society induced “fiscal tightness,” “stoppage of the land

reclamation project in Lake Nakauri and excavation of the Ohashi River," "the enactment of Takeshima's Day," "obsolescing of public facilities and decrease of the users in number," etc., which reduced our cultural, political and economic vitalities, triggered the rapid depopulation and the cooped-up feeling is drifting in our prefecture.

On the other hand there is a new trend to attract people's attention to Matsue and Izumo. In Greece recently, for example, Lafcadio Hearn's "Open Mind" was revived. Kei Nishikori became a world-top tennis player. Director Yoshinari Nishikori and EXILE TRIBE HIRO are now shooting together a highly expected movie titled *Tatara Samurrai*.

Japan and the Korean Peninsula are located at the geopolitical center of the three nuclear super-powers, the U.S.A., Russia and China. A possibility to open a new age was born here when Prime Minister Abe and his government decided to advocate "Proactive Contribution to Peace," "Vitalization of Local Economy" and "Vitalization of Woman Power." It goes without saying that the new trend must be accompanied and supported by the awakened people and regenerated small/medium enterprises.

The market of industrial sheet shutters which our company created years ago is now rapidly expanding to the world as big companies also entered the market.

Another invention of ours is a general water control system called *Yakumo Suishin*

(Yakumo water god) which uses locally developed computer language “Ruby” and cloud computing system. It was first introduced by Nomura Research Institute Ltd. at the 2010 Tokyo Forum to the audience of 2,700 as “a Social Structure for the Next Generation.” The Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism nominated it as a successful model and the system is now selling nationwide and beyond the national borders.

Recently we made a huge bronze statue of Sutoh Yahoe, a great man in the field of water control and the source of our inspiration, in Shandong Province, China, one of the worst battle grounds during the Second Sino-Japanese War. The unveiling ceremony took place in Yakumo Town, Matsue on August 1, 2014 designated as “Water Day” with the cooperation of the local people. We also started, with the help of a Carnegie Foundation and Ms. Ingrid Rollema, a Dutch sculptress, a movement to promote Bertha von Suttner, the first woman Nobel Peace Prize laureate and the author of the novel *Lay Down Your Arms* and the essay *The Barbarization of the Sky*. Ms. Tsuneko Ipp, one of the lecturers of this symposium, is assisting as the narrator the stage performance about the life of Suttner titled *Soul of Fire*, sponsored by the Embassy of Austria and scheduled to be performed in Tokyo, Hiroshima, Kobe, Kyoto and Nagoya.

We sincerely hope that this booklet will help our plan for “the Peoples’ United Nations,”

(introduced in Vienna in 2014), will sail away from Izumo into the world before the winds of the plan to achieve “Denuclearization and Peace in Northeast Asia” of Nagasaki University Research Center for Nuclear Weapons Abolition, Miss Malala Yousafzai’s winning of a Nobel Peace Prize, Izumo Taisha’s dedication of a new shrine and their auspicious event.

November 23, 2014

Akio Komatsu

President, Komatsu Electric Industries Co. Ltd., the Human, Nature and Science Institute  
Foundation



小泉八雲の開かれた精神 Open Mind  
ベルタ・フォン・ズットナー

八雲立つ出雲に甦る女性初のノーベル平和賞受賞者

---

企 画 小松 昭夫

編 者 古浦 義己

翻 訳 中村新一郎

発行日 2014年11月23日

発行者 小松電機産業株式会社

発行所 小松電機産業株式会社

一般財団法人 人間自然科学研究所

〒690-0046 島根県松江市乃木福富町735-188

湖南テクノパーク内

TEL. 050-3161-2490 / FAX. 050-3161-3846

<http://www.komatsuelec.co.jp/>

<http://www.hns.gr.jp/>





「和」のところで世界を幸せにする  
起業家12人の物語

## 日の丸ベンチャー

本書で紹介するベンチャー12社は、時流に乗って成功することのみを目指しているようなベンチャーとは一味も二味も違っている。「日本のため、世界のため」、社会のために誰かがやらなければならないことをやるという理念のもとで、持続的な価値を追求している企業だ。その会社と経営者の物語は、人として企業人として、一人の日本人として生きる上での多くのヒントや知恵、夢や勇気、そして共感と感動に満ちている。

日中韓英 4カ国語

## 中國古典名言録

学苑出版社・発行人 小松昭夫

数千年にわたって引き継がれた人類の至宝である中国古典から、今日的課題である平和、環境、健康に関する624件の名言を厳選、日中韓英4カ国語で編纂。高い評価を得た一冊。

日中英 3カ国語

日中韓英 4カ国語

## 新版 論語

1988年、ノーベル賞受賞者がパリに集まり、「人類が21世紀に生存していくには2500年前を振り返り、孔子から知恵を汲み取らなければならない」と宣言した。21世紀を生きる、人類に向けた指針。

## 魔法の経営

ベンチャービジネスの雄

小松昭夫に学ぶこれからのビジネス

三和書籍・早川和宏 著

小松電機産業が21世紀を見据えた事業を強力に推進できるのは、高い理念と実績に裏打ちされた余裕があるからだ。不可能と思えるものを可能にする「天略」経営で、高収益体質の企業に鍛え上げた小松昭夫流「魔法の経営」を紹介する。

## 母なる中海

汽水湖は21世紀文明の子宮

ダイヤモンド社・森 清 著

干陸賛成と絶対反対。思惑がらみの議論の中に、本書の主人公・小松昭夫は地球環境と生命の本質を考える「もう一つの提案」をぶつけた。中海本庄工区の事業が中止された今、先見性に満ちた発言が輝きを放つ。

あなたが動く、時代が変わる

## 太陽の國 IZUMO

地球ユートピアモデル事業

竹島独島の地球共生・縁結びの女性像、世界の戦争犠牲者を記録するメモリアルタワー、映像とITを駆使した総合平和戦争記念館など、人間自然科学研究所の構想と、それを貫く理念の原点が、ここにある。

治水の偉人「出雲三兵衛」

## 周藤彌兵衛

小説

## 清原太兵衛

児童文学

## 大梶七兵衛

漫画

各セット

300年前、56歳から一念発起、岩山をくりぬき、97歳で意宇川の川違え工事を完成させ、102歳の天寿を全うした周藤彌兵衛。佐陀川を開削し松江市の基礎を築いた清原太兵衛。簸川平野に用水を引き、穀倉地帯に変えた大梶七兵衛。3人の生き方を小説、児童文学、漫画で、全世代に届けます。

3大核大国の結節点から

和の時代が始まる

## 朝鮮半島と

## 日本列島の使命

わざわい

禍転じて福となすシナリオ——八雲立つ出雲から陽が昇る！  
中露米の3大核大国に囲まれた日本・韓国・朝鮮が世界の命運を握っている！

竹島独島問題が北方領土・尖閣諸島問題に連鎖、死者32万人の「南海トラフ」巨大地震の被害想定も重なり、東アジア情勢は一触即発の危機に瀕している。

導火線に火がつけば、中国、露国、米国を巻き込んだ人類史上例のない深刻な局面に！！



9784905323044

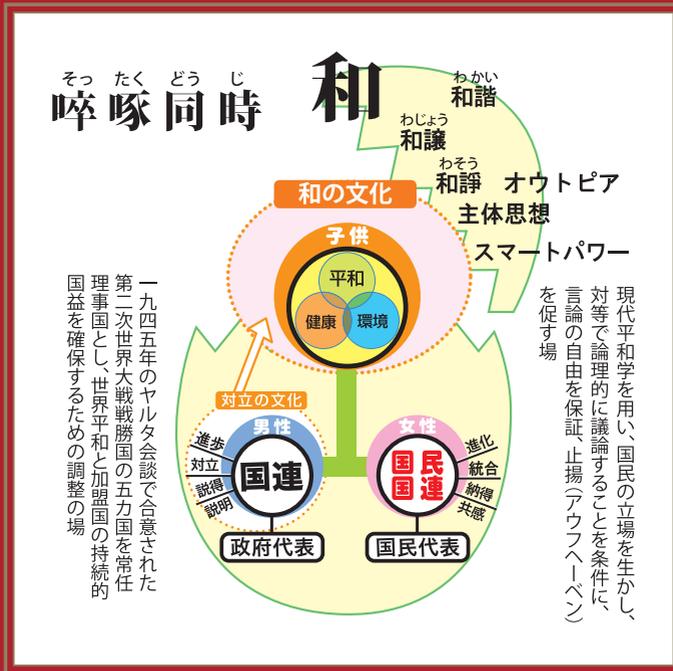
ISBN978-4-905323-04-4

C0023 ¥300E



1920023003002

定価（本体300+税）



一般財団法人

人間自然科学研究所

小松電機産業株式会社